

蛟堂報復録 2

鈴木麻純 Masumi Suzuki



アルファポリス文庫

地獄の沙汰も金次第――

業を背負う覚悟と金があるのなら――

その恨み、蛟堂に預けてみませんか？

悪いようには致しません。

「二週間以内に、」

――必ずや片を付けてみせましょう。

蛟堂店主 三輪辰史

目次

第一話 ジーキル博士とハイド氏 7

第二話 泣いた赤鬼 131

第三話 怪猫騒動 237

第一話

ジークル博士とハイド氏

どこにでもある商店街。所狭しと店が押し込められてはいるが、近年では駅前建てられた複合型のデパートに押されどことなく寂れているようにも見える。そんな通りを一つ入って、角を三つ四つ曲がった所謂裏通りと呼ばれるような場所にその店は存在していた。

真白な壁に藍色の瓦が載せられた、日本造りの平屋。外には時代劇に出てくる茶屋のような、赤い敷布の掛けられた長椅子が置かれている。瓦の上には木を縦割りにして作ったような横長の看板が取り付けられており、そこには堂々とした文字で——蛟堂——記されているのは、店の名である。その風変わりな店は江戸の中頃からずっと変わらぬままそこへ佇んでいた。戸は木製の格子引き戸で、打ち付けられた釘には「商い中」という札が掛けられている。視線をもう少し上へとずらせば、真新しい紙に文字が書かれ貼り付けられていた。

〈春夏冬五合〉——商い繁盛。

きつちりとした——流麗ではあるがどこか見た者に不遜な印象を与える——文字はこの店の店主のものである。その貼り紙は戸へとテープで留められて店の繁栄を願っていたが、それとは裏腹に戸の方は一ミリの隙間もなくきつちりと閉められており、まるで客を拒んでいるようにも思われた。

蛟堂の奥からは、かたかたと物音が聞こえる。

戸を潜り、土間から上がってすぐの口の間。襖が取り払われ、本来ならば店先として整理され、商品が並べられていなければならないはずのそこは、見るも無惨に荒らされていた。

泥棒に入られたのか。

部屋の惨状を見た人間はまずそう訊くに違いないが、答えは否である。畳の上には商品が放られて、足の踏み場を探すのにも苦労するほどだった。辛うじて身動きできる程度の狭いスペースでは、男が途方に暮れて立ち尽くしていた。

部屋を散らかしたのは、彼なのか。

それも正解ではない。彼は部屋を、片付けて、いるのであって、散らかして、いるという自覚などなかった。尤も、片付けているはずが、何故か片付かない、という現実

には気付いているらしく、その眉間には深い縦皺たてしわが刻まれている。

男ははらり、と額に落ちた前髪を後ろへ撫なでつけて、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「何で片付かねえかな」

疲れたように呟つぶやいて、その場にしゃがみ込む。足元に散らばる雑貨の類を手で除よければ、どうにか座るスペースだけは確保できた。胡座あぐらをかいて座る——彼の名は、三輪辰史みづら ときよし。蛟堂の十二代目店主である。

辰史は同居している甥おが見たのなら悲鳴を上げるであろう、その散らかり放題な床から藤籠ふすかごを一つ取り上げた。更に手近な場所に転がっていたカードを手に取り、赤のカードで「百円」と書き込む。それをぺたりと籠に貼り付け、中へ惨状の原因となつている怪しい雑貨を放り込めば、畳の上は先より大分ましになる。

ガラタタにしか見えない商品を大量に詰め込まれた籠は、まるで子供部屋にある玩具箱のようで見栄えが悪い気もしなくない。が、辰史は敢えて気付かないふりをして、広くなったスペースでごろんと横になった。

小さく舌打ちを一つ。右側へ寝返りを打って、眸ひとみを瞑つぶる。

軽く息を吸い込めば、鼻腔びくちうへとい草の青々とした香りが漂った。その独特で爽やかな匂いは、辰史に祖父の顔を思い起こさせる。先代店主であつた祖父、三輪尊みづら ときと。彼は偉大

であるが故に多忙であつた。本家で過ごすことも多く、辰史のように常に店を生活の場にしていただけではなかつた。それでも彼は、蛟堂店主として過ごす時間を好んだ。口の中に座つて、訪れる客の相手をするのを好んだ。末の孫に報復の歴史を、まるで御伽噺とぎばなしのように語ることを好んだ。

——辰史、この物語を知っているかい？

祖父の問いに首を横に振るのが嫌で、幼い頃には様々な物語を読みふけたものだ。ふつとそんなことを思い出して、辰史はゆつくりと瞼まぶたを持ち上げた。

「御祖父おじいさま様の店を散らかしっぱなしにしておくわけにもいかねえな」

やれやれと嘆息して、体を起こす。その拍子に、スーツのポケットからは携帯が落ちた。面倒臭そうに手を伸ばす——薄い機体が鈍い音を立てて震えたのは、指先が触れた瞬間だつた。

「はい、こちら蛟堂」

突然の電話に驚くでもなく、慣れた風に二つに折りたたまれた携帯を開き通話ボタンを押す。相手は客だ。うんざりと応えてしまつてから気付き、辰史は慌あわてて「依頼でしよるか」と丁寧に付け足した。

「渡部——……」

相手は問いには答えなかった。代わりに紡がれた声は自然な人間のものではない。ボイスチェンジャーを通じたような、ざらりとした人工的で抑揚を欠く声音に顔を響める。素直に「は？」と訊き返せば相手はその人工的な声のまま、

「渡部美耶を殺して欲しい」

そう、今度ははつきりと告げたのであった。

「殺して欲しい？」

辰史は相手の言葉を反芻する。こちらの問いには答えぬ相手、ボイスチェンジャー、殺しの依頼。「まあ、ありがちつつうか、実際にはありそうでなかったつつうか」そう、口の中ではやいて用件のみ告げて黙ってしまった相手へ再び問いかける。

「誰から紹介された？」

「……」

声は沈黙したままである。

「黙秘かよ」

辰史は露骨に溜息を吐き出した。長く商売をしていると、こうして何かを勘違いしたような電話をかけてくる輩がいなわけでもなかったが、それにしても――

「あんだ、テレビの見過ぎか漫画の読み過ぎだろう。確かにうちは報復屋だが、殺しを

請け負ってるわけじゃない。そもそも今時殺し屋なんてハイリスクローリターンな職業を生業なまわいにしているヤツが存在すると思うか？ 恐らく絶滅したと思って間違いないぜ。大体、物騒な上に非ゲンジツ的すぎるだろう」

呆れたように言ってる。「報復屋という職業も十分に非現実的ですし、何よりオジサンの存在自体が微妙に世間一般の常識から外れている気がします」と、脳内で甥が冷静に指摘したが、辰史は小さく首を振った。

――非現実的なものか。因果応報という理に則っている。

誰に対するものでもない反論をして、相手の言葉待つ。

相手はやはり何も言わなかった。辰史の偉そうな、それでいて乱暴な言葉に反論するでもない。依頼を冷たく断った報復屋を激しく罵るでもない。無言に、辰史は仕方なしに自ら言葉を続けた。

「というわけで、俺じゃア力になれそうにない」

やはり一方的に言ってる、通話を切る。相手は最後まで黙ったままだった。肩透かしを食った気分だ。

「人殺しだど。物騒なことこの上ないな。つつうか、誰だよ。ああいう危ない輩やからにうちを紹介した馬鹿は」

心当たりがないわけではない。むしろ心当たりが多いだけに犯人の特定が難しい。「まったく、手前の世話くらい手前で見ろよな。俺だつて暇じゃないんだぜ」と口汚く毒づきながら立ち上がり——辰史は再び部屋の惨状に直面してがくりと肩を落とした。

「かつたるいよなあ」

眠たげな顔がかくんと下を向けば、襟足だけ外側へ跳ねたくせつ毛がひよこんと揺れる。隣で欠伸を噛み殺そうともせずに、しばしばと眸を瞬かせているのは名島瑠璃也。岡山太郎の友人である。

「俺、金曜日が一番嫌い。一限から五限まで退屈な講義ばかりみつしり詰めやがって嫌がらせとしか思えない」

「履修組んだのは瑠璃也だろ？」

朝っぱらからほやく瑠璃也に呆れながら、太郎は腕時計で時間を確認した。——八時半を少し回ったところである。人の一番多い時間は過ぎたが、それでも駅のホームは十

分すぎるほど混み合っている。うんざりとして溜息を零せば、誤解を与えたのだろう。

「必修が多いんだよ！」

と、瑠璃也は唇を尖らせた。毎週お馴染みの取るに足らない会話に、太郎は苦笑。毎週どころか、日々は同じことの繰り返しだ。大学へ行き、講義を受ける。どの講義は面白い、どの教授は詰まらない、あの学部には可愛い女子が多い、今度どこそこでコンパをやるから参加しないか——等々、大学も二年目となつては、そんな会話に新鮮さを覚えることもない。真面目に講義を受けてみたり、友人に代返を頼んでさぼってみた、定期的に出される課題や試験を無難にこなしてやり過ごしていく。

叔父である辰史に言わせれば「平和で羨ましいこつたな」という日常が、太郎は嫌いだ。叔父の言う、代わり映えのしない平和な日常こそが一番だと思うのだ。

「あれ、どこ行つたかなあ」

人の流れが遅くなる。改札が近いことに気付いたらしく、瑠璃也は黒のシヨルダーバッグに手を入れて定期入れを探している。人の流れを妨げぬよう、太郎はパーカーのポケットからICカードを取り出して先に改札を通る。

時折ポーンとタッチミス音が響いては人の流れが止まり、無言の圧力で責められる朝のラッシュ時が太郎は苦手だった。

「瑠璃也?」

——あの友人は定期入れを見つけることができただろうか。

改札を通り抜けたところで、首だけで後ろを振り返る。瑠璃也の様子が気になった。友人は、学生の後ろでまだバッグの中をかき回していた。とはいえ、このまま立ち止まって待つわけにもいかない。流れの妨げになっていることは、通り過ぎていく人の迷惑そうな顔を見ても明らかだった。一先ず脇へ避けようと、人の波を横切る——背中に軽い衝撃を感じたのは、そのときだった。女の小さな悲鳴が続く。

「あ、すみません……!」

慌てて振り返れば、ブルーストライプの入ったネイビーのスーツに身を包んだOL風の女が、肩からずり落ちた鞆かばんを直している。太郎の視線に、女は渋くしていた表情を急いで和らげ「こちらこそ」そう軽く会釈えいせきして小走りに行ってしまった。

「これだから朝の駅って嫌いなんだ」

憂鬱ゆううつそうに呟いて歩き出す。と、スニーカーの爪先に何かが当たる感触。今度は何だと下を向けば、白のパスケースが落ちてている。腰を屈めてそれを拾い上げ、何気なく裏返せば中のICカードには「ワタベ ミヤ」と印字されていた。

「さっきさぶつかった人のかな」

もしかしたら、そうかもしれない。

太郎はどうすべきか逡巡した。

後を追ひ、直接渡すべきか。それとも駅員に預けるべきか。

今追いかければ間に合うかもしれない。迷った末に追いかけることに決めて、ようやく定期入れを見つけたらしく改札に並んでいる瑠璃也へ「ちよつと先に行ってる!」と短く声をかけ、太郎は人波を縫うように急ぎ足でホームへ向かった。

人、人、人——

構内は人で溢あふれている。スーツ姿のサラリーマン、制服やジャージを纏まとった学生。同じような格好をした人間が集まるそこで人一人見つけようとするのは至難むづかの業である。

それも、一言だけ会話を交わしたに過ぎないOLを探すとすれば、尚更なほさら。

(これは……無理かな)

電光掲示板の一番上に書かれた文字が点滅すると共に流れるアナウンスは、電車の到着を告げる。ホームへ電車が入ってきたことで人の動きが激しくなり、太郎は途方に暮れた。

——素直に駅員へ預けてくれれば良かった。

後悔しながら腕時計に視線を落とす。こちらにも、時間の余裕はなさそうだった。(今からこのパスケースを駅員さんに届けて、次の電車に乗る。で、駅からキャンパスまで走ったら、一限に間に合う……かな? ううん、無理だろうな)

時間を計算して、溜息。

「帰りに駅員さんに渡すしかないか」

先のOLには悪いと思わないこともなかったが、パスケースをバッグの中に押し込み、人の波に流されるように電車へと乗り込む。

後ろから押されるままに、車内の奥へ奥へと進み片手で吊革を握ってほっと一息。そこで急に——というよりは、やっとのことで置いてきてしまった瑠璃也のことを思い出し、今更ながらに心配になった。

「瑠璃也のやつ、ちゃんと乗れてるといいけど」

寝坊や不慮の事故の多いあの友人は、出席日数がぎりぎりなのだと言っていないなかっただろうか。少し辺りを見回してみても、瑠璃也の姿は見つかりそうになかった。

隣ではOLが吊革にも掴まらず、一心に鞆の中身を探っている。

何気なくその様子に目を留めた太郎は、「あつ」と上げかけた声を飲み込んだ。

(もしかして)

不審に思われぬように、こそりとOLの姿を観察する。明るい茶色のセミロング——丁度髪に隠れてしまつて、顔を窺うことはできない。ネイビーのスーツ——確か、先程ぶつかったOLも似たようなデザインのものを着ていたはずである。背格好も似ている。これで別人であるというなら、不運だったと諦める他ない。

「あの、すみません」

太郎は焦つたように鞆の口を広げている彼女へ、恐る恐る声を掛けた。OLの肩がびくりと跳ねて、鞆の中ばかりへ向けられていた顔が太郎を見上げた。

「あ、さっきの……」

どうやら彼女も覚えていてくれたらしい。太郎は「良かった」と胸を撫で下ろした。覚えていてくれたのなら、話は早い。太郎はバッグの中からしまったばかりの白いパスケースを取り出し、不思議そうに見上げる女へと手渡す。

「探し物、これじゃないですか?」

問えば、女の眸が大きくなった。

「あ……」

「さっきぶつかった後に落ちていたのを拾つて……ホームで見失っちゃったんで、どうしようかと思つていたんですけど。ここで会えて良かったです」

「あ、ありがとうございます」

女——「ワタベ ミヤ」はやはり先と同じように小さく会釈しただけだった。会話はそれきり途切れる。知り合いだったわけではない。ただ偶然ぶつかり、そしてバスケットを拾い、それを返したという、それだけの関係に過ぎない。会話が続かないのは当然のことだった。彼女の中でもバスケットを受け取って札を口にしたところで、会話は終わっているだろう。見知らぬ大学生と打ち解ける気もないようだった。

それでも少し会話を交わした以上、無言の空気に気まずさを感じてしまうのが岡山太郎という人間である。無難な会話を探すが、そのどれもがいざ口にしようとするとわざとらしいように感じられて、太郎は結局口を開かず吊革を握る自身の手を眺めていた。

一駅、二駅——

車掌の独特なアナウンスが駅名を告げる。

(ああ、降りないと)

太郎はほっとしたような、けれどどこかがっかりしたような気持ち覚えながら女へと会釈した。

「僕はここで降りるので。お仕事、頑張ってくださいね」

普段、辰史以外の周囲の大人——両親だったり、天月比奈であったり、叔父であった

り叔母であったり——に対して声を掛ける癖から思わず言ってしまった、太郎はしまつたと口の中で舌打ちをする。

(余計な一言だったかもしれない)

それほど会話を交わした相手であるわけでもない。

しかし彼女は太郎の心配を余所に、怪訝な顔をするでもなく一瞬何を言われたのか分からなかったというような顔をした後で、すぐに少しだけ目元を和らげて「はい」と気恥ずかしそうに頷いた。

変な奴だと思われなかったことを安堵しながら人を掻き分け、電車を降りる。改札を通れば、同じ電車に乗れたらしい瑠璃也が太郎の姿を見つけて預けていた背を壁から離れた。

「ひどいなあ、太郎ちゃん！ 何で置いてきぼりにするんだよ」

「あ、瑠璃也」

乗れたのか、と眩けば瑠璃也は「乗れたのか？ だって？」と臍をきいっと吊り上げ、「乗れたよ！ 焦ったあまり、間違つて女性専用車両に飛び込んだじゃったわけだけだね。俺がどれだけ居たたまれない思いをしたか太郎には分からないだろう！ やばいと思つて降りようとした瞬間にドアは閉まるし」

相当気まずい思いをしたのだろう。一息で捲し立て、詰め寄る瑠璃也を押し返しなが
ら太郎は眉を顰める。

「それは僕のせいじゃないだろう」

「分かっているよ！」

「だから怒るなって」

「……で、何で先に行っちゃったの」

余程居心地が悪かったらしい。——まあ、当然の話だ。眉を歪めたまま、追及する瑠
璃也に太郎は曖昧に笑って、

「ちょっと前を歩いていた人の落とし物を拾ったからさ」

そう、微妙に濁した。それは自分の行為をこの親友に教えてやるのが照れ臭かったか
らなのか、それとも、勤が働いたからなのか。正確な理由は、太郎自身にも分からな
かった。そんな言い訳に、瑠璃也は「へえ」と気のない相槌を打ったのだった。

(先に行くのと怒るくせに、自分はとつと帰っちゃうんだから友達甲斐がないっていう
か……)

静かな機械音を立てて左右へ開いていく自動ドア。眺めていた携帯のディスプレイを
ぱちんと閉じると太郎は小さく鼻を鳴らして店内へと足を踏み入れた。

「まったく、僕の周りってどうしてこんなに自分勝手な人間ばかりなんだろうな」

受信していた二通のメールの文面を思い出し、思わず独りごちる。一通は瑠璃也から
のもので、珍しく早めに講義が終わったらしいあの親友は「終わったから先に帰る！
太郎も気をつけて帰れよ」とそんな簡潔な内容だけを寄越してさっさと帰宅してし
まったのであった。

この歳になってまで友人と帰路を共にしたいとは思わないものの、今朝の一件で機嫌
を損ねていた瑠璃也だ。調子が良い奴め、と思わぬこともない。

もう一通は叔父——辰史からで、その内容たるや瑠璃也に輪を掛けて勝手である。

「今夜の夕飯はサーモンのマリネとドリアが食いたい」

から始まって、やれ野菜は産地が明記されているものでなければ認めないだの、サー
モンはどこ産が良いだの、ドリアはミートソースよりホワイトソースが良いだの。普
段は特別食に対するこだわりなど見せないくせに、何故か今日に限って要求が細かい。普
五百字程に渡ってびっしりそんな内容が続いているのだから、もう嫌がらせとしか言い
ようがない。

「どうせ何を食べても大して味の違いなんて分らないくせに」

ぼそりと暴言を吐いて、太郎は迷わず物菜コーナーへと向かった。誰が作ってやるものか、と不機嫌な顔をしたまま惣菜を物色する。白い棚へと並べられたポテトサラダや金時、ローストビーフといった出来合いの惣菜たちを流し見していけば、

「あつたあつた」

サーモンのマリネ。

(ドリアも冷凍食品でいいか)

本格的に夕食を作ることが面倒になって、太郎は買い物カゴの中へマリネを入れると反転して冷食コーナーへ向かった。すぐにシーフードドリアを発見。手を伸ばすと、太郎よりも僅かに早く横から伸びた手が目当ての物をさらった。

ほっそりとした白い手だ。スーツの袖から覗く華奢な手首にはアンティークもののような洒落た腕時計が嵌められている。手、手首、腕——辿ってゆけば見知った女の顔があった。

見知ったというか、今朝見たというか。

「今朝の……」

女の紅を差した唇からは、驚きの声が零れた。アイシャドウで彩られた眸が大きく見開かれて、太郎を見つめる。視線は、すぐにカゴの中へ移された。太郎はそのことに気

付くと、カゴをサツと後ろ手に隠して小さく頭を下げた。

「どつとも」

「今朝は、ありがとうございます」

唇が緩く弧を描く。

「いや、元々は僕が突っ立っていたことが原因ですし」

「ぼんやりしていた私も悪いから。あの時間、混みすぎて困っちゃいますよね」

OLは大人びた笑みに苦笑を滲ませた。疲労の入り交じったその表情に、どう返せば良いのか分からずに曖昧に頷く。

「あ、そういえば——」

「はい」

「これ、良かったらどうぞ」

差し出されたドリアを思わず受け取る。受け取ってしまったてから慌てて返そうとすれば、女は一步だけ足を引いた。遠慮をするな、ということらしい。

距離は僅かに届かない。太郎は申し訳なく思いつつも、素直にそれを受け取ることにした。決まりの悪さのような、気恥ずかしさのようなものを感じてしまったのは、普段そうして譲られることがないからなのかもしれない。横暴な周囲の人間たちを思い出し

て、太郎は肩を落とした。

「すみません」

頭を下げる。OLはやはり人の好きそうな笑みを浮かべたまま、小さく頷いた。

まだ更けきつてはいない、群青の夜空にはまばらに星が瞬く。

闇色に染まったアスファルトを、等間隔に設置された外灯が橙色に染める。昼間は賑わっていたのであろう公園も、今は子供達の姿はない。代わりに集まっている学校帰りの学生の姿を横目で眺めながら、渡部美耶は足早に歩いていく。

表通りへと近接したマンシヨンの幾つかを過ぎて、通りを入ればこじんまりとしたアパートが佇んでいる。

ポストを確認。必要な郵便物以上に詰め込まれたダイレクトメールやちらしに顔を顰める。溜息を吐き出しながらそれらをまとめてバッグへ押し込んで、美耶は狭い階段を上った。もう住み始めて四年ほどにもなるが、階段を上がってすぐのその部屋が美耶は好きではない。

片手でバッグの中を探り、鍵を取り出す。鍵穴へと差し込み軽く回せば、かちりと音がして解錠される。取っ手を掴み、ドアを外側へ開こうとした瞬間に、携帯が音を立てた。

ディスプレイに浮かんだ上司の名にうつすらと眉根を寄せたのは、これまでの経験上そうしてかかってきた電話が好ましい内容のものではないことを知っていたからだ。

いつだってそうだ。会社であろうと家であろうと、用事を思い出せばその場で連絡をしてくるのだから迷惑この上ない。「明日、会社で言ってくればいいのに」誰が聞いているわけでもなかったが、小声で呟いて舌打ちをする。

ほんの少しだけ、着信音を流したままで様子を見る。しかし電話が鳴り止む気配はなく、美耶は仕方なしに通話ボタンを押した。ぷつっという小さな音と共に聞こえたのは、壮年にそろそろ差し掛かろうとしている男の低い声。

「渡部さん？」

「はい、渡部です。何かご用でしょうか」

声のトーンを若干上げて、愛想を滲ませながらも淡々と問う。

「急な話で申し訳ないが、村上君が今月付で異動することになってね」

「はあ」

上司と折り合いの良くなかった後輩の顔を思い出しながら、美耶は生返事で返す。続く言葉の予想はできたが、こちらから問うことはしない。言葉を待って沈黙を続けければ、上司である男はようやく先を続けた。

「村上君の仕事を引き継いでくれないか。勿論君が忙しいのは十分に承知しているが、他に適任者がいないのだ」

「……期限はどうなっているんですか？」

やはり、と密かに溜息を零しながら美耶は問い返す。確か彼の任されていた案件の締切はすぐに迫っていたはずだった。

(でもまさか、期限までそのまま引き継げなんてことは言わないよね)

美耶の嫌な予感を肯定するように、問いに対する返事はない。携帯を握りしめる手へと僅かに力を込め、「八木さん？」返事を促すように、もう一度問う。

携帯の向こうで返答に窮していた相手は、焦ったような上擦った声を上げた。

「それに関してはこちらでも出来る限りのことはするが、上にも掛けあってみなければ分からない。渡部さんもそこを踏まえて善処して欲しい」

——つまりは何とかしろということだ。

「ちょっと待ってください」

「すまない。詳しい話はまた来週、君が出社した時にしよう」

ぶつり。逃げるように切れた携帯の、通話時間のみが浮かぶディスプレイを美耶は恨めしげに眺めていたが、しばらくして我に返ったように携帯を折りたたみ、バッグの中

へと戻す。

荒っぽい手つきでドアを開き部屋の中へと入る。一人暮らしの部屋には自分以外に誰もいない。後ろ手で閉めたドアは思いの外、大きな音を立てたが気にもせずに、美耶は靴を脱ぎ捨てた。スーパリーの袋もバッグもまとめて玄関へ放り出す。電気も点けずに、美耶は部屋の中を進んでいく。

「もう、最低」

低く咳いてベッドへ四肢を投げ出すが、疲弊した体とは逆に覚醒しきった精神が眠ることを許さない。妙に冴え渡る意識に吐き気を覚えながら、美耶は薄暗い部屋の中を見渡した。

独り暮らしの女の、特に特徴もない部屋だ。棚の上に飾られた時計は静寂に満ちた部屋へと規則正しく秒針の刻む音を響かせている。

適当な食事を摂り、風呂に入り、一息つく間もなく仕事の下準備をする。そうしてベッドへと身を沈めれば、朝がやってくる。毎日、毎日。日常をただ繰り返す自分に、美耶は時折虚しさを覚えるのだ。

時計の傍へと立てかけられたカレンダーに視線を移す。月捲り式のカレンダーは、先月のままになっていた。今月ももう半ばを過ぎている。

「ほんと、何やってるんだろうな。私」

自嘲しながら更に視線を移動させてゆけば、本棚の隅で伏せられた写真立てが視界に映った。処分しよう、と思っただけながらも忙しさを理由に捨てることのできなかつた写真だ。

美耶は写真立てから再び目を背ける。面倒なことは、休日に考えればいい。そんな風に自分に言い訳をしながら、のそりと上体を起こしてテーブルの上へと手を伸ばす。手探りでライターと煙草を探し当て、薄闇の中で点火。煙草を吸うようになったのは何時頃からだっただろうか。ほんやりと考える、が、思い出すことができない。

溜息混じりの紫煙を吐き出し、美耶は火の点いた煙草の先をじっと見つめた。赤く燦る火がじんわりと先端を焦がしていく。じわり、じわりと。

美耶は唇を僅かに動かした。独りきりの部屋で、声を出したところで聞く者など他にいない。けれど、思わず声をひそめてしまったのは喉の奥から出かけた己の声があまりに冷たく硬質であるように思われたからだ。

——むかつく。

「死んじゃえ」

無感情な声で誰に向けてでもなく呟いて、美耶は吸いかけの煙草を灰皿へと押しつけ

た。ぐりぐりと、押しつけたその先が冷たい金属でなく他の——例えば誰か、他の腹の立つ誰か——人間の腕であったのなら、相手の苦悶の表情に少しはこの苛立ちも紛れるのだろうか、と、物騒な考えを持って余しながらじっとテーブルの上のライターへ視線を注ぐ。

手に取り、プリントホイールを回転させればパッと小さな火柱が上がった。ゆらゆらと揺れる炎を眺める。空虚であった胸の内へと何かが広がっていく。

それらは充足感や幸福感などといった感情ではない。安らぎからは程遠い、もっと激しく凶悪な、理性を厭う何かだ。

炎の明るさから逃れるように瞼を落とす。閉じた瞼の裏側に浮かぶのは原色の赤だ。激しく鮮烈な色に美耶の中の何かがゆっくりと頭をもたげる。眸を開いても、他力本願で世界が変わることはない。それは御伽噺の世界にのみ起こりうることで、現実はいつも自分次第だ。

(そう、自分次第だ)

頭の奥深くから囁き掛けるその声に耳を貸すことも、このまま苛立ちを抱え続けることも、全て己の選択にかかっている。

理性も善性も、煩わしくなる時がある。

深みに手招きされるように、全てが煩わしくて堪らなくなる。人の言葉も笑顔も全て、爪を立てて引きちぎり、壊してしまいたくなる。それをすることが叶わぬ代わりに、何か別の、もっとか弱い存在を傷つけることで憂さを晴らせば良いと、理性を嘲笑う獣は美耶に囁きかけるのだ。

平素であれば嫌悪を感じさせる醜い囁きは、けれど感情の波が荒立っている時に限りこの上なく甘美な誘いであった。

そこには深い思考や葛藤など不要で、苦悩や苛立ちも存在しない。社会の従属者という立場を一時だけ忘れさせてくれる。

美耶はライターの火を消すと、ベッドから起き上がった。

青年の朝は早い。

夜が明けて数時間と経っていない空はまだ乳白色のかかった青をしている。太陽の光は柔らかで、穏やかだ。陽光を受けて鈍銀色にも見えるアッシュグレイの髪が自転車のペダルを踏む度に後ろへ撫でつけられる。

「うーん、やっぱり晴れた日が一番だよな」

青年——十間あきらは鼻歌交じりに呟いた。

「今日は比奈さんが昼飯食いに連れて行ってくれるっつってたし。絶好の奢られ日和ってやつ？」

比奈の顔を思い出すと、頬が緩む。稲荷運送の所長である彼女は、営業所近くに居を構えている。出勤日は誰より早く出社して、従業員を出迎えるのが常だった。一度くらいは比奈を出迎えて「お早うございます！ 比奈さん」と声を掛けてみたいと思っているのだが、実現させるのは難しかった。

あきらの家は、稲荷運送から少し遠い。自転車ですら四十分ほど。帰りはともかく、朝のその時間は、あきらにとってもどんな時間よりも長い。

ビルとビルの合間を縫うように佇む黒くて小さなビルに最初こそは何か堅気ではない商売をやっているのではないかと怯えもしたものの——そしてある意味でその予想は当たっていたのだが——馴染んでしまえば稲荷運送の社員はみな気の良い人間ばかりだった。

営業所のドアを開けると「お。あきら、早いじゃん」「今日は寝坊しなかったんだ？」で

も寝癖ついてるよ。ほら、鏡」「おいでおいで。お姉さんが直してあげるから」「やめろって。あきらら君はシヨチョーに直してもらいたくないんだよな?」「お前ら……それくらいにしないとあきららが泣くぞ」それぞれ勝手なことばかりで時にはいい加減にしてくれと思ふこともあるが、実のところ皆からそうやって構われる現状をあきららは厭うて居るわけではない。何より、

「お帰り、十間君」

配達から帰るたびに比奈からかけられるその一言に、あきららは安堵する。長く見つめることのできなかつた自分の居場所へとようやく辿り着いたような、そんな気になるのだ。

毎朝早くに起きて、自転車に跨る。そうして四十分をかけたところでようやく稲荷運送の皆と顔を合わせることができ、一日が始まる。未だに慣れない不思議な荷ばかりを運び、あつという間に一日が終わり、後ろ髪を引かれるように営業所を後にする——毎日が繰り返したが、その繰り返しを望むように夜になれば早く朝が来ることを願って已まない。

「早く一人暮らししてえな」

陽光の眩しさに眸を細めながら、あきららは呟いた。

(一人暮らしを始めたなら、最初に比奈さんと呼ぼう)

そんな妄想にも似た夢と希望に胸を膨らませて、あきららは鼻歌を再開する——はずだった。抗議にも似た仔犬の鳴き声が割って入らなければ。水を差された気分だ。あきららはむっとして、辺りを見回した。

「何だよ。人がせっかく良い気分になってるのに」

口ではそう言いつつも自転車から降りてその姿を探したのは、小さく響く鳴き声にどこか引つかかるものを感じたからだ。

あきららは犬を一匹飼っている。幼い頃に妹が拾ってきた雑種だ。今ではあの頃の貧弱さなど見る影もなくたくましく育ったが、妹の腕の中で力無く鳴いていたその声と今聞こえる鳴き声はどこか似ている気がする。

数歩その姿を探して、あきららはひたりと足を止めた。路上に点々と残るそれはまるで足跡のようではあるが、赤味が強い。錆鉄色をしている。

(怪我をしているのか?)

血の痕を辿っていく。近所のマンションのゴミ集積所で血痕は途切れていた。

「どこだ?」

灰色の電柱に手を添える。破れかけた貼り紙が風にかさかさと言を立てて揺れていた

が、あきらの手が触れると辛うじて貼り付いていたテープも——風化していたのだろう。簡単に剥がれて、アスファルトの上を転がっていった。

くうん

破れて飛んでいった貼り紙を思わず目で追ってしまったあきらは、近くで聞こえた鳴き声に慌てて視線を足元へ落とす。

——だった。

電柱の裏を覗き込めば、集積所を囲うコンクリートと電柱との僅かな隙間で震える仔犬の潤んだ黒目があきらを怯えたように見上げていた。

——眠い。

はしゃぐ子供の声が、鼓膜に響いている。赤ん坊の泣き声と、それをあやす若い母親の穏やかな声色が混じる公園。太郎はベンチに腰掛けて、微睡んでいた。

昨晩は叔父が投げ出した部屋の片付けに追われ、夜を徹してしまった。あの妙に細かい夕食のリクエストは、太郎の帰宅時間を遅らせるための時間稼ぎだったらしい。叔父

の計算よりも随分と早く帰宅した太郎は、口の間の惨状に閉口するしかなかった。

「まったく、今まではどうやって生活してたんだか」

鈍く頭痛がする。休日であることだけが幸いだった。膝の上には受信したメールを開いたままの画面で、携帯電話が放置されていた。瑠璃也からだ。

「お前も大概仲が良いよなア。休みの日まで連んでんのかよ。彼女とかいねえの？ 寂しすぎるだろ」

出かけ際に叔父からかけられた言葉を思い出して嘆息する。

——確かに、寂しすぎる。

瑠璃也のように露骨に彼女が欲しいとは思わないが、それにしても公園のベンチで男友達と二人で待ち合わせ——とは虚しいものがある。太郎は苦虫を噛み潰した顔で、膝の上の携帯を閉じた。「悪い！ 寝坊したから遅れる」という友人からの連絡はそのままだに、ふああと小さく欠伸をする。

あの友人も、どうせ遅れるのならもっと早く連絡をくれれば洗濯物を干してくるくらいはできたのだが。

透き通るような青空を見上げ、飛ぶ鳥を見つめる。くるりと輪を描くように旋回して

いた鳥は高く吼えて木の枝に生い茂る葉の中へと飛び込んだ。それを目で追っていた太郎は視線を木の枝から下ろし――

「あ」

(つて、昨日もこんなことがあったような)

妙な既視感に首を傾げる。少し離れたベンチへ座る女は、ジーンズにカットソーという簡素な格好をしてはいるが紛れもなく昨日会ったOLだった。昨日は背中へと流されていた髪は、今は一つにまとめ上げられている。視線は遊ぶ子供たちを見ているようである。眺めていることに決まりの悪さを感じて、太郎は声を掛けることにした。

ワタベミヤさん。

と。すぐそこまで出かかったのは、恐らくは彼女のものであろう名だった。が、彼女自身から聞いたものではなかったことを思い出して飲み込む。代わりに「あの」と声を投げかければ、遠くを見ていた眸が太郎を捉えて驚いたように大きくなった。

「こ、こんにちは」

「ええと、」

「岡山太郎です」

「岡山君、ええと、家、この近所？」

「いえ、商店街の西通りの方なんですけど、友達と待ち合わせをしていて。その、」

名前を呼ぶことができずに困って視線を美耶へと向ければ、彼女は太郎の言わんとしていることに気付いたらしい。

「人に名前を訊いておいて、自分が名乗らないとか失礼すぎますよね。ごめんなさい」

「いえ」

「私は、渡部美耶。ここから住宅街が見えるでしょう？」

美耶の細い指先が、建ち並ぶマンションのうちのの一つを示す。

「あの辺り。家賃は少し高めなだけだね」

肩を疎めて、ぼやくように言う。その仕草が大人びて見えた美耶に似合わず、太郎は少しだけ意外に思いつながら相槌を打った。

「まあ、この辺りは全体的に高いって聞くけど。岡山君のところは？」

「僕は……一人暮らしっていうわけではなくて」

「彼女と同棲？」

「違いますよ！ 両親が海外に出ているので、叔父の家に居候中なんです」

「そっか」

細い顎を引いて頷くに留め、それ以上問うてくることをしなかったのは、そこに複雑

な家庭事情を想像したためか。先回りして人の聞かれたくない部分を避けるあたり大人だ、と太郎は変に感心した。

太郎の周りの大人は良くも悪くも遠慮がない。美耶みたいな人間は、社会に出れば多いのだろう。けれど、今の太郎にとっては酷く新鮮な存在だった。

「その叔父というのが、まあ、叔父といっても八つしか離れていないんですけどね。何と言うか、仕事以外には全く興味が無い人で」

「あ、だから昨日も夕食を？」

美耶はくすくすと笑う。

「ごめんなさいね。笑うの、失礼だとは思っただけど何となく想像できてしまうというか」

「……？」

「苦勞してそうな顔してるってこと。ほら、眉間に皺しわ」

視線で示されて、太郎は人差し指で自身の眉間辺りへ触れた。確かに。うつすらとではあるが、そこには皺が刻まれている。

——叔父じゃあるまいし、冗談じゃない。

ぞつとして思わず伸ばせば、美耶はころころとおかしそうに声を立てて笑った。

「そんなことしても駄目だって！ 息抜きが一番だよ。友達と遊ぶんでしょ？」

「はい、まあ。美耶さんは？」

「私も、息抜き。休みの日の公園、好きなんだ」

笑いを静めた美耶の眸が再び遠くを眺めた。視線で追う。先には、砂場で遊んでいる子供の姿があった。

「子供、好きなんですか？」

「……うん。好きだよ。癒されるじゃない？ 私も昔はあんな子供だったのかなあ」

眼差しには懐しむような色が浮かんでいた。「思い出せないや」彼女は薄い化粧の施された顔で、寂しげに言った。

「ま、こういうことを言うようになったらおばさんになっちゃった証拠ね」

「何言ってるんです。美耶さん、若いじゃないですか」

「岡山君みたいな学生さんからそういう風に言われるのって、嬉しいというより何だか傷つくな。気を遣わせちゃってるみたいで」

子供のように唇を尖らせる美耶に、太郎は笑う。

「考えすぎですよ」

「そうかな」

「それに僕は、美耶さんみたいな大人になりたいと思いますしね。叔父さんのようにな

るよりは」

「ある意味気になるなあ。岡山君の叔父さん」

呆れたような眩き。「でも……ありがとう」続けて照れたように吐き出された言葉の意味を、太郎は訊けなかった。美耶の視線は太郎を通り過ぎて、その後方を見つめていた。「あ、走ってくる子が見えるけど、岡山君のお友達じゃない？」

首だけで後ろを振り返れば、確かに瑠璃也の姿がある。寝坊したというのは本当なのだろう。普段からくせの強い髪は寝癖でさらに酷いことになっている。

急いで来たという努力は認めて許してやるか。そんなことを思いながら太郎はベンチから立ち上がった。

「じゃあ、失礼します」

べこりと頭を下げて背を向ける。公園の入り口で日向ぼっこをしていた猫が、太郎の姿を見てひょいっと茂みの中へと逃げていった。

「さつき話してた女の人って、太郎ちゃんの知り合い？」

隣を歩く瑠璃也が、にんまりと笑った。アーモンド型の眸をいやらしく細めて、

「太郎ちゃんって浮いた話とかないなーってずっと不思議に思ってたんだけど、もしか

して年上が好きなわけ？ どこで知り合ったの？ ナンパ？ それとも逆ナンされた？」

興味津々といった様子で、先からずつと喋り続けている。

反応を返してやるのも面倒だが、無視してしまうには鬱陶しい。太郎は友人を一瞥し「違っよ」と一言で否定をすると、歩調を速めた。

「落とし物を拾っただけ」

「またベタな出会いだなあ」

「だからそういうのじゃないって。ていうか、瑠璃也はそういうことばっかり考えるから、思考が透けて見えるって女の子に逃げられるんじゃないか」

「酷っ」

「小早川こばやかわさんも言ってたよ。瑠璃也君って、何が悪いってわけじゃないけど何か残念なんだよねって」

もう一人の友人の口調を真似て、言ってる。先まで調子に乗って喋っていた瑠璃也は、情けなく呻いてようやく口を閉じた。

そのまましばらく無言になる。

言い過ぎたか。「親しき仲にも礼儀あり」幼い頃から母親に口を酸っぱくして言われた言葉を思い返し、太郎は苦い顔をする。尤も、その礼儀とやらを通すのは専ら自分ば

かりで母の兄弟らにしろこの親友にしろ、いつだって無礼講ではあるのだが。

「で、今度提出するレポートに使う資料を探しに行きたいんだっけ？ 瑠璃也は」
律儀な自分の性格を嘆きながら、太郎は話題を変える。

「あ、ああ。うん。そうそう。指定された本、学生協には売ってなくてさ。ええと、何て本だったかな」

本の名をメモしてあるらしい。瑠璃也が携帯を取り出し、メール画面を開こうとした丁度その時、タイミングを見計らったかのように携帯が音を立てた。割り込むようにして切り替わったディスプレイには「鬼堂六」——きどうりく 幻影書房げんえいしょぼうの店主である男の名が表示される。

瑠璃也は怪訝な顔をしたが、「出なくていいのか？」と促せば慌てて通話ボタンを押した。

「あ、鬼堂さん？ 名島ですけど」

用件を告げられているらしい。瑠璃也の表情が僅かに曇る。

「今ですか？ 太郎と一緒になんですけど……今から？ すぐじゃないと駄目なんですか？ 予定が変わった？ 分かりました。じゃあ、先に寄ってきますから。はい。伝えておきます」

通話を終えると瑠璃也はがっくりと肩を落とした。

「太郎ちゃん、先に稲荷運送に寄っていいかな。鬼堂さんが、預かってきて欲しいものがあるって。多分そんなにかからないと思うから、一人で時間つぶしていてくれてもいいけど」

「いや、付き合うよ」

瑠璃也の視線が一瞬だけ公園の方へと向けられる。太郎はそれに気付かぬふりをして即答すると、「早く行くこう」そう、瑠璃也の背を押した。

「こんにちは。稲荷運送です」

女の涼しげな声が外から聞こえた。その声を辰史は知っている。否、稲荷運送の社員の声であれば誰でも知っているのではあるが、そういう意味ではなく辰史はその声の主をよく知っていた。

口の間は、商売の場としては、いざよ些か殺風景すぎるのではないか。そんなことを思っ蔵から出して来た品物の荷解きも中途半端に、辰史はひょいっと土間へ降りる。もどかし

げに靴を爪先へ引っかけて、それでもシャツの皺を伸ばすことは忘れずに戸の前で深呼吸。

解けかけていたネクタイを直し、額へと落ちてきた前髪を丁寧に残るへ撫でつけ、引き戸のガラス部分を姿見代わりに確認。よし。何の問題もない。一つ頷いて、ようやく戸を開けば、そこには予想に違わず普段は配達に出るはずのない稲荷運送所長——天月比奈の姿が在った。

「珍しいな。今日は荷が多いのか？」

「いえ。ちよつと事情があつて営業所の方にいられなかつたので、緑さんと交代してもらつたんです」

比奈は困つたように眉尻を下げて笑つた。

「事情？」

「その……営業所の方に犬が」

歯切れ悪く答える比奈に、辰史も事情を察して「ああ」と頷く。

比奈は狐憑きである。所謂、昔話や民間伝承に出てくるような、野狐が人に憑き悪さをするといったものではない。比奈に憑く狐は善狐であつた。

裏伏見、と呼ばれる一族が存在する。

高天を筆頭とした、狐憑きの一族である。彼らは稲荷神を信仰し、それ故に一族には狐憑きが生まれることが多い。狐憑きは神子として——一族と稲荷神の橋渡しの存在として重用される。三輪の一族以上に特異かつ閉鎖的である。

比奈はその高天一族の傍流、天月家の一人娘である。あつた、と言つた方が正しいのかもしれない。本人曰く今は勘当の身で、今後も家へ帰る予定はないらしい。

(というか、帰れないのか)

辰史は決まりが悪そうに佇む恋人を見下ろしながら、密かに溜息を吐き出す。

善狐、と一口に言つても種類は様々である。が、基本的に高天一族が信仰をする稲荷神の御使いは白狐である。昔から決まっていた。誰が決めたのかは分からないが、輩出される狐憑きのほとんどが白狐を宿していたのだから仕方がない。比奈に憑く狐——御霊は言わずもがな、黒狐である。

異端者はいつの世も、そしてどこに居ても迫害されることが理不尽ながらも世の常である。比奈の場合も例外ではなかつた。

人形のような冷たい顔を眺める。鳶色の瞳は落ち着いているように見えるが、いつでも奥に激情を秘めている。日常を失う怖れを、孕んでいる。

黒狐である御霊はほんの少しだけ——こういう言い方するのが正解であるかは辰史

にも分からないが——血の気が多い。恐らくは事情を知らないあきらあたりが拾ってきただろうが、縄張りに居座る犬は御霊の警戒心を高ぶらせたに違いない。一族における比奈の事情も影響してか、過剰防衛の傾向にある御霊である。

「それで、わざわざ俺に会いに来てくれたのか。比奈」

四年経っても未だに不安定な状態の御霊を御することのできない自身を、不甲斐なく思っているのだろう。どこか意気消沈した比奈に、辰史は殊更明るい声で言った。

「むしろあれだろう。犬は建前で本当は俺の顔を見たかっただけだったりするんだらう？」

「いや、あの、ちゃんと届け物はあるんですけど……」

よく見れば、彼女は胸の前に大型の封筒を抱えている。差し出された届け物を受け取ると、辰史はそれを広敷の方へ放り投げた。伝票へ適当にサインをして「これでよし」と手を打つ。「仕事終了。上がっていけよ。太郎もいねえし、俺だって茶くらはい淹れられるぜ」

両腕を広げて歓迎する——も、比奈は少しだけ残念そうな顔をして、近くに停めてあった運送用バイクを指さした。

「すみません。まだ他の荷物が残っているので……寄っていきたいのは山々なんですけ

ど。でも、工作中ですし」

却って困らせてしまったらしい。「どうにも上手くいかないもんだな」辰史は胸中でひっそりと零して苦笑する。

「ああ、分かってたさ。無茶言って悪かった。ただ、」

お前が心配なだけだ。と、という言葉は飲み込む。

不安に不安を重ねて事態が好転することなど何もない。代わりに辰史は自分の胸の位置にある比奈の頭へと手を伸ばした。ぼん、と幼い頃に祖父がしてくれたように撫でてやれば、やはり幼い頃自分がそうしたように、比奈は瞳にほんの少し安堵の色を浮かべた。「週末辺り、また泊まりに行くから」

後ろ髪を引かれるようにバイクに跨り「じゃあ、また」そう手を振る比奈に声を掛けて、その姿が見えなくなるまで見送る。

（我ながら一途なもんだ）

遠距離恋愛じゃねえんだぞ、と呟きかけて苦い顔をしたのは、以前自分と比奈のやり取りをそう喻えて笑った知人の顔を思い出したからだった。

辰史は思い出して顔を曇らせたまま、胸元のポケットから煙草の箱を取り出す。一本、煙草を唇に咥えてからライターを部屋に置きっぱなしにしたことに気付き、頭をがりが

りと掻きながら戸を潜れば比奈から預かった封筒が目が付いた。「誰からだ？」

持ってみると意外に重い。裏返しても差出人の名は書かれていなかった。胡散臭く思いなながら、靴を脱ぎ捨て口の間に上がる。

棚の上へと置かれたライターを手に取り、ようやく煙草に点火。すうつと一服したところどころと畳の上へ腰を下ろすと、辰史は手にしていた封筒を躊躇いなく開封した。荒っぽい手つきで破られて、中身が床へ零れる。写真だ。動物の――

「なんつー趣味の悪い……」

それが何の写真であるかに気付いた瞬間に、辰史は煙草を唇から離して思い切り顔を響めた。

「嫌がらせてレベルじゃねえだろ。こういうのはケーサツに持って行け。ケーサツに」尤も、警察に持って行ったところで彼らは何かをしてくれるとは思わないが。

散らばる写真には、動物の姿が写されている。ただの、というか、普通の愛くるしい動物の写真であれば言うことはないのだが、その写真は異様であった。

少し見ただけで吐き気を催して、辰史はそれ以上目を通さぬように視線を逸らしながら写真をかき集める。封筒の中には写真だけではなく何らかの書類も入っていたよう

はあるが、このような写真を送りつけてきた人間が相手だ。ろくなものではないだろうと一緒にまとめて裏返す。

衝動的にゴミ箱へ捨てようとした辰史だったが、思い直してやめる。こんな目立つものを捨てておいたら、すぐに甥が見つけて騒ぐだろう。

「……裏で焼くか。まったく、面倒なことをさせやがって」

毒づいて、一先ず太郎が開けそうにない手近な引き出しの中へ突っ込む。何かこの気分の不快感を紛らわすことのできるものはないか――辰史は部屋の中を見回して、蔵から出して来た荷が解き途中であったことを思い出した。

「そうだ、これがあったっけな。太郎が帰ってくる前に飾っちゃおうか」

立ち上がり、解けかかっていた紐をぐいと引っ張る。埃で薄汚れた布を剥がせば、中からは一枚の鏡が覗き、辰史の不機嫌に歪んだ顔を映した。

すんすんと犬が鼻を鳴らす音が響く。

稲荷運送の営業所では、十間あきらが仔犬に餌をやっていた。